

[第四回日本言語文化研究会発表要旨]

韓国近代文学の中の日本文学

——1920年代の文芸誌を中心として

申 銀 珠

(1992・6・13発表)

一

韓国の近代文学がその形成期において日本の影響を多大に受けていたことは想像するにたたくない。1910年の韓日合併以後、1920年代にかけて形成された初期韓国文壇の中心勢力は、当時の日本への留学生、あるいは留学経験者であった。近代化に目醒めたばかりの当時の韓国は殆どの情報を日本から受け入れており、文壇も例外ではなかった。

小論では、主に1920年代の韓国の文芸誌・新聞の文芸欄を中心に、当時の韓国文学の、日本文学との関わりの実態を探ることを主眼としている。当時の韓国の文学者は日本の文学や文壇をどのように理解し評価したのか、それが、創作活動にどのように反映されているのかなどを具体的に把握することによって、韓国近代文学を見なおすとともに、日本文学の新しい一面を浮き彫りにすることができると思う。

日本文学との関係を探るにあたって、現在まで調べたところ、文学作品の翻訳・紹介、日本文壇の批評、書物の引用・借用など数多くの資料を見ることができたが、ここでは韓国の純文芸誌である『創造』『廢墟』に載っている日本詩の翻訳を中心に考察することにする。

二

韓国の1920年代は、1919年3月1日の独立運動と関連して新しい転換を迎えることになる。三・一運動は、朝鮮の独立を国際社会に訴える各界各層の知識人、学生たちが宣言文を公表する中で、全国的に行なわれた抗日独立運動である。3月1日から同年5月末までの独立運動の死亡者数は7,509人、負傷者15,961

人、収監者46,948人とされている。非暴力万歳運動であった三・一運動への弾圧の苛烈さと熱気を想像することができよう。

三・一運動は失敗に終わってしまったが、しかしながらそれは、日本政府に朝鮮統治政策にある程度の変化をもたらすきっかけとなった。寺内総督の武力政治にかわる、いわゆる斉藤総督の文化政治の登場である。

この時期の特に注目すべきことは、『朝鮮日報』『東亜日報』などの民間新聞や、『創造』『廃墟』などの純文芸誌、総合雑誌『開闢』などが刊行されたことである。『創造』は1919年2月東京で、当時留学生であった金東仁・朱耀翰・田栄澤などによって創刊された韓国最初の純文芸同人誌である。二号までは東京で刊行されたが、三・一運動以後は韓国に移され続刊された。1921年5月、九号を最後に廃刊されるまで、『創造』は、啓蒙主義文学に反対して写実主義文学を主張し、口語体文章の確立と自由詩の紹介と完成に努力した。

『創造』の創刊号と二号(1919・2,3)には朱耀翰(1900~79)の『日本近代詩抄』が載っている。『創造』の創刊当時、明治学院の中学部を卒業して一高在学中の19歳の青年だった朱耀翰は、川路柳虹によって刊行された『伴奏』『現代詩歌』に多数の日本語詩を発表したこともあり、当時の日本詩壇に最も接近していた人である。

『日本近代詩抄』で朱耀翰は、日本詩壇を前半のロマンチズム時代(一)、後半のシンボリズム時代(二)に分けて、翻訳とともにそれぞれの詩人についての啓蒙的な紹介を加えている。

(一)と(二)の訳詩を示すと、藤村の『おきく』『四つの袖』『小諸なる古城のほとり』、土井晩翠の『丞相』(『星落秋風五丈原』の一節)、横瀬夜雨の『お才』、薄田泣菫の『泉』『山雀』、蒲原有明の『さいかし』『霊の日の蝕』、岩野泡鳴の『無言の石』『鍵を与へよ』『月と猫』、三木露風の『四月』『心の奥』『林檎の樹かげに』『春』、白秋の『邪宗門秘曲』『狂へる街』『角を吹け』『空に真赤な』『わかき日の夢』『硝子切るひと』『芥子の葉』などである。

『日本近代詩抄』は朱耀翰が自ら「序説」に、「日本の近代詩の紹介は、新しい詩がうまれつつある今の朝鮮においても無意味なことではなかろう」と述べているように、訳编者としての朱耀翰の意図は、日本近代詩の成立の道程と全体像を紹介するところにあつたのであろう。

日本近代詩に対する関心は1920年7月創刊された『廃墟』の創刊号にも表われている。『廃墟』は、『創造』などの同人誌運動に刺激されて金億・黄錫禹・廉想渉らが中心となって作られた同人誌である。1921年10月、二号を以て廃刊されてしまったが、『廃墟』の同人たちは「廃墟派」と呼ばれ『創造』の「創造派」とともに1920年代初期文学を代表する存在となった。

『廃墟』の創刊号には黄錫禹の『日本詩壇の二大傾向——附 写象主義』が掲載されている。黄錫禹（1895～1959）は早稲田大学政経科を卒業して『廃墟』の同人になった人物で、1910年代後半、三木露風の影響を受け、いち早く象徴派詩人と呼ばれた。また1921年には韓国最初の詩専門誌である『薔薇村』を主宰した。

『日本詩壇の二大傾向』で黄錫禹は、日本詩壇の主潮に象徴主義運動と民衆詩歌運動の二つの傾向があるとし、「日本象徴主義の詩歌」という題で、日本の象徴詩を一期、二期、三期に分けて、それぞれ詩人と詩集を紹介している。訳詩に重点を置いた朱耀翰の『日本近代詩抄』とは違って、『日本詩壇の二大傾向』では詩人一人一人について比較的詳しい紹介と評価が加えられている。言及されている詩人は、第一期として上田敏、岩野泡鳴、蒲原有明、第二期詩人として三木露風、第三期詩人として日夏耿之介、萩原朔太郎などである。

詩人と詩集の紹介に続いて、象徴詩の理論として、山宮允の『詩文研究』の第一章と第二章の「イマジズムとは何ぞや」「象徴主義解説」を要約して紹介している。訳詩は三木露風の『解雪』、蒲原有明の『赤い鳥』、日夏耿之介の『丘の上の忍黙』、北原白秋の『狂へる街』、山宮允の『魂のあくがれの国』、柳澤健の『歎』『秋』、西条八十の『顔』萩原朔太郎の『天上縊死』、岩野泡鳴の『永劫の力』など十篇である。

『廃墟』の二号にはヴァン・ダイクの『日本風景詩』が李丙燾訳で載せられている。『日本風景詩』はヴァン・ダイクが1920年5月4日、日本に来て一カ月ぐらい滞在しながら、日光・京都・奈良などを旅行して書いたものである。ヴァン・ダイクは旅行のかたわら、早稲田大学で一回、東大で二回講演をした。

6月2日『東京日々新聞』にはヴァン・ダイクの写真とともに、「米の大詩人から我社へ詩三篇 日本を謳へる言葉の版面」という見出しと関連記事、それから『The Red Bridge at Nikko』の自筆草稿と『日光の赤い橋』『カンデレ

イブラ』『奈良の休息』という題の三篇の訳詩が載っている。李丙燾の訳詩はこの『東京日々新聞』に載っている日本語訳からの重訳と考えられる。当時早稲田大学で歴史や社会学を専攻した李丙燾は、今日文学者よりは歴史学者として高名な人である。従って彼の訳詩を文学史的にさほど評価するほどのことはないかもしれないが、むしろこれは当時の日本という社会で同じ時代を生きた青年の記録として解釈すべきであろう。しかも文学というものが新しい知識や情報を伝える意味も持っていた当時の朝鮮での状況を考えると、李丙燾の訳詩には日本での特記すべき出来事を紹介するという素朴な意図も含まれていたと考えられる。

#### 四

『創造』『廢墟』など、韓国近代文学の草創期の注目すべき文芸誌に西欧詩の日本語訳を含め日本の近代詩が数多く翻訳・紹介されていることは、韓国近代詩の形成に日本の近代詩が多大な影響を及ぼしたことを示している。

原詩と韓国語訳を読み比べてみると、助詞や用言の活用形まで酷似していること、日本の定型詩の七・五調の韻律は三・四を基調とする韓国語の韻律に見事に生かされていることがわかる。朝鮮の近代詩の確立を目指す若い青年詩人たちにとって、文法や韻律に類似性を持つ日本の近代詩は、最も近付きやすい良い見本であったに違いない。

このように韓国近代詩の形成期において、多数の日本語詩が訳されていることは、若い青年詩人たちが日本留学を通して近代文学を受容したという当時の時代状況もさることながら、日本語を直訳することで、殆ど無理なく原詩の意味と雰囲気を再現できるという、日本語と韓国語の類似性に起因するところも大きいと考えられる。

『創造』の創刊メンバーだった金東仁が「日本と日本語の存在は打ってつけのものだった。統語的に似通った日本語は、色々な意味で先進的な役割を果たしてくれた」（『文壇三十年の足跡』）と述懐しているように、韓国の言文一致、口語体の確立に日本語の影響が大きかったことは否めない。

韓国の近代詩が定型詩の行き詰まりを経験しないまま、口語体自由詩から出発したのはこうした西欧や日本の近代詩の翻訳・模倣によるものであった。とはいえ、文芸誌の創刊当初から、日本語の詩が盛んに翻訳・紹介された背景に

は、それまで卑しいとされた口語を詩語、すなわち詩の言葉にまで高めて、民族固有の生きている言葉で文学を創作したいという、若い詩人たちの熱意があったことを見逃してはなるまい。しかし韓国の1920年代の詩の流れをみると、口語体自由詩が盛んに作られる中で、伝統的な情緒や韻律を生かした定型詩、民謡詩の運動が新しく登場するが、これは、外来の模倣による自由詩というものに対する反省と懐疑に他ならない。

<お茶大人間文化研究科（博士課程）2年>